
Eccentric Designer

山下 真也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Eccentric Designer

【ノード】

N8437C

【作者名】

山下 真也

【あらすじ】

失われた細菌兵器。それを奪い返すべく、Hージェントとその親友の頭脳戦。スピード感あふれる、分かりやすい短編小説。

覚醒

「ねえ、君の名前…なんだつたつけ？」

寝汗が首をついたうタイミングで聞いたと思つ。

「結衣よ、結衣。昨日さては酔つ払つていたのね、あなた。」

鳥の声も聞こえる…昨日のことを覚えてない…

昨日のこと？いや、昨日どころじゃない！ここにある自分が何の物體でさえわからない、思い出せない！たしかに見覚えたのあるものなのに…

「結衣つて言つたよね、昨日の夜のことなんだけど…」

「えつ、あなたも…なの？」

「どうゆづこと？」

なにも飲み込めない現状の中で、なにかがムズムズと背筋を這つているような感覚を感じた。

「実は私、一時間前には田が覚めたんだけど、私は誰？状態だったの！今のあなたと一緒に！」

「私の名前が結衣、あなたは龍一ってな具合で段々と頭の中に浮かびだしたのよ…」

「まあいいや、それでどんな現状？今は…」

すゞい汗だなこの一結衣と言つ女。

「まあ見ておもしろくなるわよー」

「通常のパターンでは無いと思われます。」

「ほう、それはおもしろいじゃないか。さつそくだが早急に頼むと、クライアントがつるわるやうのでな」

頭は多少ぼんやりしているが、頭には何種類かの映像が浮かぶ。
しかし…この映像は…なにか赤い…血…

それは明らかに目の中が真っ赤に染まつて訳が分からなくなつてはいるが、なにか匂いまで思い出す…気がする。

そして視界が晴れて、なんだろう?この建物なにか古いお城?みたいな建物だがここに、ここに行かなくてはとゆう意識が働く。部屋を見渡し、クローゼット?たしかそうゆう名前…裸のまま歩き開けてみる。

「ちよつと…服ぐらい着なさいよ!」

「あつたぐ、つるわるとい女だな、この状況でよく平氣でいられるもんだ。」

俺はこの時点ですべてを思い出していた。

「気がしていただんだ、この時点では…

「結衣、仕事に行こうか?」

「ん?仕事つて?…そうね…」

「結衣はまだすべて思い出したわけじゃなさうだ、俺のほうが追い越したようだな。」

「ゲツ!そ・それは…なに?…

「俺達の商売道具だ…」

俺のベッドに並べだした物、スーツ、そして…拳銃、小型レシーバー、ボタン型の超小型爆弾、地図。

「早く思い出せ…おいていくぞ!」

すべてをスーツの中に収めた俺はそう言つと、最後にレシーバーのイヤホンを耳に刺した。

「おはようございます。滝本さん。」

「おはよ。もつやつといいのか？」

「もちろんです、今回は急ぎの様なので……」

「わかった。出るわ」

「あつ、滝本さん！ それよりも今回、体の方が……」「体がなんだ？」

「いえ、体だけじゃなく脳血身……とにかくなにもかもが……」「違うんだろ？ 感じてるよ」

「そうですか……ならいいんですけど……」

「いいんじゃないの、もともとこの世にない体なんだろ？」

「じゃ気をつけて、行ってらっしゃい。」「こいつの名は、沖本。

ICFの科学エリアの責任者だ。

仕事の連絡、俺達の体の管理等の仕事をしてくれてはいるが、俺達のプログラムはすべてこいつが組み立て、動かされてると黙つてもいいな。

「できたわよ、用意。」「

結衣が声をかけてきた。

最高のパートナーだ、身体能力、頭の回転、なにからなにまで完璧だ。

それに体の相性もいい。

人間ではないが……そんなことは俺にとってなんの障壁にもならないかつた。

「龍二、こいつもと違つわね。」「

「どこのが？」

「うーんなんとなく。覚醒も早すぎるし、なにもわからないふりを覚醒するまで続ける小芝居いらないよね、絶対。今日またくタイムラグがあつたらたまんないわよこいつちはそれもプログラムに入つてんだから。」

「仕方ないだろそれが俺の脳にはそれがいってのが沖本の自論なんだから。」

それより、行くぞ！」

ミッショング

なんだかうつ、秋なのに日差しは強いし、なんだか暑い。

「しかし今度の仕事…」

「ん? なに? 仕事がどうしたの?」

「嫌な感じだ」

「仕事にいいも悪いもあるの?」

「……」

「私にはいつもとかわんないよつた気がするけど…違つと言えばスケールかしら、でも今までにもこのぐらいのケースはこなしてゐるわよ、私達」

「そうだな」

今度の仕事…たしかに結衣の言つ通り、取り越し苦労つてやつかな。東京の景色とはかなり違つて見える山々、湿度も少し違つた。まあおよそ都会の真ん中にはこんな施設は作れんだろうが…少しの間車を停め見取り図らしきものを見てみる。

ここまで調べてるんだつたら自分達で出来んのかねなどとも、うん、いつも思うなそれは。

たしかに一人で潜入するにはかなりの広さだが今までこなしている…

やはり俺が気になるのは人…か。

もう一線は退いてはいるが、鐘巻 善五郎。

このじじい日本人では知らんやつはいないだろ、俺でも知つてるぐらいだしな。

表では海外支援とかで逆に政界を退いてからのほうが有名かもしれん。

俺に言わせりや、じつゆつやつが一番信用できんがな。

そして反町 大吾。

鐘巻の懐刀とゆうところか…そんなやつではないと思うが…

鐘巻と一緒にいるところは絶対見せないやつが、この山奥の要塞でだけは、顔を合わせる…間違いなく重要拠点には違いない。

大吾がいる、それだけでこのミッションは倍額になるな。

もう二十年もたつが、同じ大学にいた大吾は百年に一人の逸材と呼ばれ、俺とは対比するとそれこそまったく正反対の、ここ今まで違う人間がいるのかとゆうぐらいの違い方だった。

だから気があつたのかも知れないが、あの四年間一緒にいなかつた日のほうがまれだつたな。

善と悪、だつた二人が悪と悪になつてこの対面か…懐かしさなんてセンチメンタルなものとつぐに無くしていた自分の心に大吾が入つてきたことに、むず痒く、笑いさえこみあげるのだった。

「おや珍しい、笑つてるよこの人。」

およそ見たことの無い、パートナーの顔の変わり具合がとても新鮮でおかしく見えたらし。

「もうそろそろ車を隠さないとな。」

「そうね。」

お互いの顔の神経が少し変わるので、お互に感じる瞬間だった。

「おい、もうそろそろいいだろ。

教えねぇか今度の仕事、なんなんだ？」

俺はイライラしてるのでつて雰囲気丸出しで沖本に聞いた。

「細菌です。」

「そんなこつたろうと思つたぜ、軍隊でも行かせりやいいじゃねか、ばかやろう！そんなもん持つてる敵が、たつた二人の敵に、敵にだぞ！お・き・も・と！はいですかと渡す。

そんな適当な警備なわけないだろうが！」

「フツフツフツフツ」

いつ聞いても嫌な笑い声が聞こえる。

「いたのかい？」

「いたらダメかな？」

「そんなら話が早い、なんとかしろよ！」

このいないとと思っていた、いるともおもっていたが、こいつが俺達のICFのボス、川上 三郎だ、もちろんこいつがほんとのトップだとはだれも思ってはいないが、ICFではこいつが全責任を担っている立場にいる。

こいつに声を掛けられた時が俺達の人生の終焉だったかもな。

「お前達は軍隊より弱いのか？」

これだ、これでいつも乗つちまつ俺も結構単純だなど、仕事が終わつた後に思う。

「わかつたよ、行けばいいんだろ？ この装備でねえ。」

「それもいつもどうりだろ？ 奪えばいいじゃないか、フフ。適当な警備じやないんだろ、敵は？」

そのとうりだね。

もういいや。

「いい死に方しねえぞ、じじい！」

「お互いにな。

それより滝本君、反町君とは旧知の仲だが大丈夫……いや失言だ

つた、取り消すよ。」

「ふん！じゃあな。」

傷跡

わてこれからどうするか…

野宿は久々だが、車を隠し、おおよそ人が来ない場所、しかも敵が見える場所？で起こした火を見つめながら、考えていた。

「今度の仕事はいきあたりばったりとは行かないわね。」結衣も同じことを考えている様だった。

「けど龍一が気にしてるのは、やっぱその反町って人のことじよ？そんなにすごいの？」

「いや、頭だけならそりゃあ、沖本のほうがいいにきまってるわ。けど俺が引つかるのは、きっとそんなことじやないと思つ。もつと氣味が悪い、いつもこっちを見透かされている様な…」

「野性の勘つてやつね。

龍一の野生の勘は、ばかに出来ないからなあ。
それで何回も助かってるから……とにかく、今日は寝ましょ。明日、どうしても行かなくちゃならない訳でもないから。急ぎで、つてだけでしょ？」

「そうだな。」

言つとおつこじよつと思つた。

ダダダダダダ、タタタタタタ、「コウワーン！

なんだ？これは？

戦場にいる、後で考えれば、夢。

俺は昔お思い出し、夢につなされてるらしい。

「へりはまだか？ ジャン！ これ以上は食い止められんぞー・ジャン！ ジャン？」

そこには頭が半分欠けた戦友がいた。

「こつまで……

俺は咳やいたのか、心中で言つたのか、分からなくなっていた。
迫りくる敵、死んでいく戦友、普通の日本じゃまだ小学生ぐらいの
子供に銃を向けられ、俺はもうどうかなりそうな状況の中で、ただ
ただ人をどうしたら殺せるか考えていた、自分が生き残る為に…
はっ！と目が覚める…

「女とエッチなことしてる夢でもたまには見ればいいのに…」

火をじっと見ながら、膝を抱えて咳いている結衣がいた。

この女は俺があの頃の夢しか見ないのを知っている唯一の女だつ
た。

「もう朝なのか…」コーヒーの香りを感じながら、また首筋につ
たう寝汗を拭つていた。

さてどうしようかな？しかし敵はある大吾だ。

もしかして今現在、俺達の場所さえ確認されているかもな。

などと考えながら、「尻尾まで逃げるか？」結衣に聞いてみた。

「逃げる気なんか最初から無いくせに…」
そうゆうひとだな…

潜入

「山本 結衣? なにもんじや?」

「どうやら加田先生の紹介で支援のほうに入ったのが三ヶ月前、来てすぐ支援の方でちょっとした事件がありました…」

「事件?」

「はい。」

その時の対応が上原から上がつてきました…

「おぬしの皿に留まつた… とゆづ」とか…」

「まあそういうことです。」

「まあおぬしがそこまで言つたなら間違いないじゃひづが、いきなりこの要塞にのつ… よほびの女じやな。」

「すべてにおいて、完璧といわざるおえんでしょうな」

カタン、ノックの音と同じタイミングで老人がグラスを置いた。

「どうぞ。」

「失礼します。」

「ほおづ、これはべっぴんさんじやな。」

鐘巻はいやらしい微笑みを浮かべ、その目だけは笑わず、その女の心をのぞくことに集中していた。

「君は、相当出来る様じやが、この要塞に来ること、こやこの要塞をみてなんとも思わんかね?」

「はあ、それは多少の疑問を感じてはおりますが、反町さんから先生をお名前が出た瞬間に、覚悟を決めておりますので…」

「覚悟?」

「はい。」

「私、先生が副総理をなさつていてる時にすでに感服しておつましたので。」

「ほう、見所はあるが、わしのどの部分にじや。」

「先生の悪の部分に。」

「これでも善人で売つておつたんぢやがのう、どうで分かる?」

「人相といいましょうか…細かく訊つと申ですね。」

瞳の奥にある、暗闇が見えまして…

この要塞から出て行くことが、永遠に無かつたとしても私、悔いは残しはしないと思います。

そうゆう覚悟ですわ。」

「大吾が気に入るはずじやな。」

肝もすわつとるわい、ガッハッハッハッ、まあお願ひする。頑張つてくれたまえ。」

「はい、よろしくお願ひします。」

ふう～まつ、こんなもんか…

それにもしても、こんな要塞、頭に機械でも入つて無かつたら、絶対に迷子になるわね。

ながいこと居ればまあ覚えるんだろうけど。

どうするのかしら龍一は…って考えてもしようがないし、三日間とにかくつらうらしましようかね、私は…場所覚えるフリしながら…

「ルートは頭の中だし俺は暇になつたな…結衣は間違いないだらうし、武器はあそこにあるし、忙しいお一人さんが居ない三日後に向けて、何かやりのこしたことがないか考えとこうか…」
などと余裕がまだまだあつた俺に、インカムから声がしてきた。

「チイース!」

「いらない。」

「えつ!」

「いらない。だ、馬鹿、聞こえねえのか?」

「そりやないつすよーりゅうさん。」

俺だつて来たくて来たわけじゃないし、ドクターに言われて來てんスから…

それに今回、暴れるだけじゃないでしょ?お宝になにかあるとボス

も首飛びしよから。」

「そんなことじるか、ちやんとやつてやるかい、お前は帰れ！」

「たつきもつとむーん、わがまま言わないでトモコみお、ボスがうるさかつたんでね、今回は……」

「そりだらうな。

だからって俺の任務はお守りじやねえだろ？」「んなのいらねえよ。

「まあまあ純ちゃんも、腕上げていつうか、腕なんていらないでしょ、ただ運ぶだけなら……」

「だから、運ぶってことは俺か結衣がこの馬鹿に渡すつてことだろうが！天才！そじで必ずなんかやるし、やつてきたんだよー。」
「わー！」

…長い沈黙。…

「わかり

「わかった、やらしてやるよ、ただし最後だ、純。

今度やつたらその場で殺すぞ。

それでもやるのか？俺は嘘は苦手だぞ。」

沖本の返事を割つて、俺が承諾した。

純は涙ぐみながら、なにか決意のよつたものを瞳に燃やしながら

言葉を吐いた。

「よろしくお願ひします……」

「いやあ、丸く收まつて、良かつ
プチッ。

無線を切つてやつた。

「結衣はここには居ないが、やつも命がけだ。

それ忘れんなよ。」

純は言葉が出なくなつたらしい、黙つて、ただただ頷いていた。

俺は、惇に丸一日かかつてミッションの進行を叩き込んだ。

「すうじつですね、相変わらず。

随所に無茶苦茶が一杯だ。

よくいつもこれを普通にやりますね。」

「俺達には普通だし、大吾や親父、沖本、そして結衣にいたっては、このぐりこじやなきゃダメねって言われるよ、きっと。

ただ…」

「ただなんですか？」

「さっきも言った様に、大吾は侵入者が俺だとわざって無くっても、対応出来るってことだ。」

「うーん…それじゃどうしたら…」

「アドリブだな。」

「アドリブ？」

「ああ、考え方駄目だ。

感性の勝負になるだろ？」

つまり……適當ってことかな。」

「はあ～？ 適当ですか？」

「感性なんてそんなもんじゃねーの。」

「大丈夫なんですかね…」

「大丈夫かどうかじゃねーだろ？ やんなきゃしょーがねーんだから。」

「

「そーですね。」

と、惇に言ったものの、俺の胸騒ぎが止まる」とはなかった。

ずっと感じているこの感覚、大吾との空気感とか、相性の悪さとゆうか…

「死ぬかもしけねえな」とゆう言葉を俺は飲み込んだ。

俺達の仕事はそうゆう仕事じゃねーか、なにを今更…驕ってるんだな、絶対死ないとでも思つてんのか、俺は馬鹿になつてゐるのかもうがきたかどつちかだな。

「そろそろ君は消えたほうがいい、これは龍一と俺の戦いだから……」
夕日を見ながら大吾が呟く。

「えつ」

「なにも知らないと思つてた？」

君たちのこと。

僕らの組織もそのぐらいの情報網は持つてゐつもりだけど。」

「じゃああなたは知つてて？」

「うん、ぶつちやけ退屈なんだよ、僕。
なにもかもが……」

「ふうん、私達は退屈しのぎつてわけか……高くつくわよ、この退屈
しきは。」

「そう願いたいね。」

僕は零か百の勝負がしたいんだよ。

君達との勝負を純粹に楽しみたい。

自分の限界を見てみたい……」

綺麗な目をして言うわねこの人。

吸い込まれそう。

けど本心みたい……

「老人と僕が両方居ないってリーケしたのも僕だし、君の仕掛けた
爆弾もすべて除去したし、後は龍一がどう細菌を持ってこの要塞か
ら出るかだけなんだけど……」

「そうゆづことか……それじゃさすがの龍一も無理かもね。」

「随分余裕なんだね、すべて洩れているにも関わらず。」

「余裕があるのはそっちじゃない、すぐ感じるけど。」

「そうかな……」

「それに……」

「それに？」

「あなたはどうかわからないけど、私には少なくとも龍一は未知数なのよ、単純にわからない。」

「そこだよ！僕もそうゆう意味で期待してるんだ。

龍一に。

そして大袈裟かもしないけど、この世でそれが出来るのはあいつしかいないって思つてるんだよ、ほんとに。」

「変わった人ね。」

「お互にね、早く行つて教えてあげなよ、振り出しだって。」

「それがそうもいかないかも。」

困った顔で答えるしかなかつた。

またかよとも思った。

グワイーン！ビー！ビー！ビー！

けたたましい警報音だわね。

お互いの顔を見つめる。

「ねつ、予想出来た？」

「この人、なんて嬉しいそうな顔するのかしら。」

「たまんないよ！この思考回路が僕には無いんだ！さあ始めよう！」

「なんなのよ！私、どうしたらしいのよ。」

なんで撤去された私の仕掛けた場所で爆発が起きるのよ。

いらなかつたんじやない、私。」

怒る間も無く次々に爆発が起きる。

「惇ちゃんて子も入ってるってことか。」

「じゃ次は武器庫？」

「逆よ、武器庫はもう終わってるわ。」

トリックスター

「今頃、田を白黒せてるでしょうねー」反町はー。

「惇君、大吾を驚かすのが目的じゃないでしょ……そんなことはどうでもいいんだよ！」

少々骨は折れたがな。

今、自分に出来る全力疾走で走りながら、次の目標に向かっていった。

「けどりうして、結衣さんのことばれてるって分かつたんですか？」

「なんとなくだよ、なんとなく。

まあそれが大吾にはアドリブに駆けついて、トリックに感じるのや。

結衣は切れてるだらうけどな。」

「いいんですね？ 結衣さんほつといいで。」

「お前殴られるぞ、結衣！」

「どうして？」

「あいつは慌てちゃいねえよ。

大吾は女相手にするやつじやねえし、たとえ殺されそうになつたつて、結衣は一人で脱出出来るんだよ。」

「なんでそんなことわかるんですかー絶体絶命の危機ですよー！」

「それはお前の価値観さ。

少なくとも、俺や結衣は違う。

そうゆうもんなんだよ、ぼうや。

殴られたいなら、止めねえよ、助けに行けば？」

「わかりましたよー！」

敵が回りに居ないのを確認し、俺は立ち止まった。

「どうしたもんかな？」

「なにをですか？」

「だから嫌だつたんだよ、お前を連れてくるのは…

大吾が俺達の持つてゐる図面通りの場所に細菌なんてもん置いてるはずねえだろ？

その場所の見当がつかねえから悩んでんじゃねえか！

「なるほど……けど。」

「やっぱそりだよなあ、大吾の懐だよなあ。

けどそれだとお手上げなんだよ。」

「えつ。」

「わかんねえか。

大吾を生かしたまま奪い取るしかねえんだよーけどそのぐらーの策はあるだろうし、殺したらその場でバーンだ。」

「じや自分達も…」

「お・わ・り・だ。」

まったくいつもいつもこのパターンだ、嫌になるぜ。

結局正面かよ…

「と、彼も考へていろいろはづだ。」

「その裏でここには無い、とか？」

「君はほんとに素晴らしい女性だね、アンドロイドでなければ結婚を申し込むよ。」

「それはどうも、けどあんまなめてつと、自爆するわよ、ニヤニヤしちゃって。」

「それでもいいんだが、もう少しこのゲームを楽しみたいんでね、僕は。

すぐなくともここまで期待を裏切りはしないビックリか、さすが滝本つて動きしてるのでね、彼は。

僕は痺れてるんだよ、この結果に。

「だめだわこいつ、いかれてる。

「けど言えないよ。」

「なにを？』

「さっきから逃げようと思えば、いくらでも逃げられたはずだ君は、

それをしなかつたのは、細菌のありかを突き止めるため。

「そうだろ？」

「じゃ単刀直入に。

『E』にあるの？細菌は。

「遠いところだ。

また綺麗な横顔を、今度は月明かりに照らしながら、とても愛し

そうに呴いた。

決 着

俺は瞑つていた目を開いた。

「大吾に会うか…」

となりでじつと俺を見ている惇の視線は気にせず、俺はまた走り出していた。

「どうかね？」

「これは先生。」

まったく素晴らしいチームですよ、HCFは。
僕の範疇はとっくに超えます。」

「すごい評価だねえ、君にしては。」

しかし結果はこの通りだからね、私たちは共存に値しないな。

「おっしゃる通りです、残念ですが。」

「そこそこに、撤収したまえよ、君も。」

「はい、分かりました。」

そう言つて電話を切ると不思議そうな顔をして、大吾は、私の顔を覗き込んだ。

「まだまだ随分余裕のようだね、君、いや君達は…」

「そう見える？」

「見えるねえ、なぜだらつまるで強がりに見えない余裕だ、種明かしはまだ先かな？」

「うーん、自信は無いけど、なんか感じるの。」

「だつて…」

「だつて？」

「私を助けるつもりなら、あいつ、足でも折ったんじゃないの？」

「どうゆつこと？」

「こんなに時間かかったことないもの、私を助け出すの。」「おじこちやんなどこでいるの？」

爆発つてタイマーで起しせるし、第一爆発が起きてから何分たつてるの？

あんた馬鹿じゃないんでしょ。」

少し考えていた大吾の顔から血の気が引いていくのが分かった。

「まさか！」

「そのまさかしかないでしょ、そうなつた以上もつ間に合わないわ。」

すっと視線を落として、目を閉じ、呼吸を整えていたように見えた。すじく静かに。

「やすがだね、負けた…」

「そうゆう顔のほうがさわやかで好きだなわたしは。で私を道ずれにする気？」

彼は静かに首を振った。

「最初からそんなつもりはないよ。

君はここから早く出で行きたまえ。そして龍一に伝えてくれないか？

ありがと、と。」

帰還

「なんだ? ヒツチハイクか?」

「キイー急ブレーキを踏んだ。車を止め窓を開ける。

「シユ!」

完璧なストレートだつた、俺の顔が歪み、脳ミソが揺れる。

「さつさとニアあけなさいよ!」

サツサツ、惇のこんな早い動きみたことねえぞ。

「どうどう。」

なんて面してんだ、実に卑屈だ引きつりてるだ。

ドカツつと女は座つた。

「お疲れさん、完璧ね相変わらぬ。」

「そりや。」

ヒリヒリするせつぺたをわすつながら、俺は言つた。

「で?」

「どうやつたのよ。」

「まあだいたい結衣の思つ通りじゃないの?」

「ふうん、だいたいね。」

「おじいちゃん、どうだつた? 龍一が現れた時。」

「うん、ありやあやつぱ大したもんだ、うん。まったく動じず、おお、よく来たなつて感じよ。」

「ふーん。」

「それどころか急に悲しそうな顔して、大吾はひのせのまゝの龍一の顔も曇つて行く。

「やつぱ自分の息子ぐらじに思つてたんだらうな。」

「最後はほれつてよ、ほづり投げやがつた。」

心臓が止まるかと思つたよ、まったく、細菌だぜ。」

「けどまだまだそりゃつ兵器? こいつぱこあるんでしょ?」

「そうだな、それで金儲けしてやがるんだ。」

「何百人死ぬんだぜ。」

「また行かなきやね。」

「俺はごめんだけどな。」

後ろの小僧が行くんじやねえの。」

「一人じゃ行きませんよ、俺は。」

「じゃそこのおばちゃんと行くんだな。」

「バキッ!」

さつきと逆の頬が歪む。

「わかった、お姉さん。」

「馬鹿! そんなこと言つてんじやないわよ、あんたも行くのー。」

「へいへいわかりましたよ。」

「言いましたね。」

またこの馬鹿だ沖本とはじまへく蝶うなについて決めたんだ。

プチッ。

いつもの様に無線を切った。

そしていつもの様に、アクセルを踏んだ。

帰還（後書き）

最後までお読みいただき、ありがとうございました。
私にとっての処女作で、なんか殴り書きの様な感じさえ自分では
しています。

けど、せっかく忘れられないうちに作品になると思います。
これからもジャンルにとらわれず、がんばって行きますのでよろし
くお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8437c/>

Eccentric Designer

2010年10月8日22時42分発行